都市公園における『横になる』姿勢の誘発要因に関する研究
～南池袋公園の分析を通じて～

都市空間生成研究室
1941039　　金澤　碧

都市公園　　横になる　　南池袋公園
姿勢　　誘発要素　　公共空間

1.　研究の目的と背景

国土交通省が公園緑地行政の取り組み推進のため「新たな時代の都市マネジメントに対応した都市公園等のあり方検討会」*1 を設置した。検討の末、課題は「時代の変化や多様化するニーズに対して、十分にそのポテンシャルを活かしきれていない」ことであり、今後重視すべき観点のうち「都市公園を一層柔軟に使いこなす」ためには、地域との合意に基づく弾力的な運用とまちづくりの一環としてのマネジメントが求められている。また、都市公園の管理において、ホームレスの野宿という寝ることによる場の占拠が問題視されており、他の利用者の公園利用を滞らせることに繋がっているとの指摘もある。

南池袋公園の利用者の滞留行動は「立つ」「座る」に加え「横になる」姿勢で滞留している人も少なくなく、これがより人々の活動を多様化させていると考える。

以上から、「寝る」ことは空間占拠として管理上問題になるが、「寝る」ことを伴わない「横になる」姿勢は「都市公園を一層柔軟に使いこなす」滞留のあり方として、今後公園内アクティビティをより多様にさせる可能性と、デザインすることに一定の有効性があると考えられる。

そこで本研究は、近年整備され柔軟で多様な公園利用を目指す都市公園の南池袋公園を事例に「横になる」ことが誘発される内的な要因を明らかにし、公共空間の公園の利用促進や利用の可能性を拡げることを目的とする。

2.　研究の方法

本研究では、次の順序で研究を進める。

① 実態把握調査から施設物と利用者の姿勢と滞留行動の分析し、「横になる」姿勢の人の特徴の整理
② 利用者へのヒアリング調査により「横になる」ことへ心理的に分析
③ ①②により「横になる」姿勢の誘発される要因の考察

3.　南池袋公園の実態把握調査

3-1.　公園施設調査

本調査は「横になる」姿勢を促す要因となる常設物や道具の実態を把握するために、対象地の観察調査を行う。そこから 6 つの仕掛けとなる公園施設を抽出し、「横になる」姿勢の人の滞留場所と芝生上での「横になる」姿勢の人と地べたとの配置関係を明らかにした。

3-2.　公園内における滞留時の姿勢の傾向調査

多くの人が一度に共有する場所は、他人を意識せざるを得ない。そんな中、よりプライベートである「横になる」姿勢の誘発の要因を探るため、利用者の滞留時の姿勢の向きや視線の傾向調査を行った。「横になる」姿勢の人は南向きで外を向かず内を向く傾向にあり、また他人同士の視線が交わらないことが明らかとなった。利用者は「横になる」姿勢の人の足の向き、座る・立つ人の体や視線の向きを考慮して滞留場所、姿勢を取っていることが考えられる。

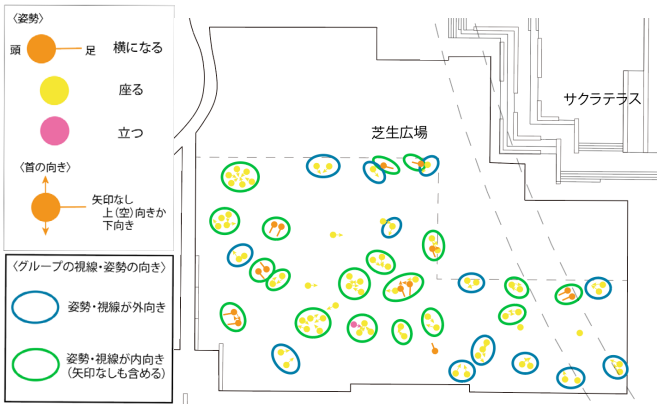

図 1.　3 つの姿勢と向きのプロット図

3-3.　「横になる」姿勢の人のアクティビティ調査

3-1 の芝生上はゴザ、レジャーシート類、地べたの 3 つの方法で「横になる」姿勢をとるという結果を受け、詳細な芝生上の実態を把握するため、3 つの方法を数、滞留場所、行動から調査を行った。利用人数は地べた＞レジャーシート類＞ゴザで地べたは 13 種類、レジャーシート類は 9 種類、ゴザは 7 種類のアクティビティが見られたことが分かった。

4.　利用者へのヒアリング調査

3 章で得られた事象を中心に芝生上の滞留者の心理を把

握するため、利用者へヒアリング調査を行った。
共通項目①公園の利用頻度②快適な「横になる」姿勢の生活への要望と理由
調査⑴③各姿勢時の気分④各姿勢を取る理由
調査⑵⑤各利用方法時の気分⑥各利用方法を取る理由
調査⑴⑵の対象者はそれぞれ 5 組、9 組である。

4-1. 「横になる」姿勢の動機に関する分析

ヒアリング内容をポジティブ（横になりたい）、ネガティブ（横になりたくない）、課題解決のカテゴリに分類した。ポジティブな心理を得る要素は、芝生の感触や天候の良さ、疲れが取れるなど休憩に最適な姿勢であること、ゴザという補助具である。反対に、ネガティブな心理を得る要素は、芝生の付着、天候の悪さ、体の向きや視線など周囲との関係、ゴザの不潔さや制限数である。より横になりやすくすることを目指した課題解決の要素は、空間のデザイン、ゴザの管理、地べたの整備が挙がった。

4-2. 「横になる」姿勢の行為者の評価

4-1 の要素を環境的、心理的、面的にまとめることができた。環境的要素は、芝生広場や気象・天気といった与えられたものに対して利用者が感じ、姿勢を選択するまでに至る特徴を指す。心理的要素は、利用者自らが「横になる」姿勢を考える、または取った際に得られる姿勢に対しての肯定的な心理や、「横になる」姿勢がつくる個人の空間に対して肯定的・否定的な心理が働くという特徴である。面的要素は、主に「ゴザ」という地面の上に「横になる」姿勢をとるための補助具的存在の要素に対する心理で、芝生広場の直接地面に触れる事への否定的な心理を打ち消してくれることや身軽に公園に来訪できることが利用者は肯定的に考えている。しかし、ゴザの魅力は伝わっているが清潔さや貸し出しの数など管理面に対して否定的に捉えられてしまっていることがわかる。

5. 「横になる」姿勢の特性に関する考察

3 と 4 で得た「横になる」姿勢の人の特徴を環境面と心理面に分け、更に環境施設面、前提となる環境面、内発的心理面、外発的心理面の 4 つのカテゴリで分ける。

5-1. 環境施設面

環境施設面は、滞留場所となる芝生広場と補助具的なツールのゴザの 2 つの要素を抽出した。芝生は対象地のように整った管理体制による運営が必要で、ゴザは無料の貸し出しにより利用者が使いやすく、芝生に対する否定的な要素を無くす存在が「横になる」姿勢を促進する。

5-2. 前提となる環境面

前提となる環境面の要素は、天候である。悪天候の場合、屋外の滞留で「横になる」姿勢を促し快適に楽しむことは難しい。また、調査から気候が良い中で南へ足を向けて「横になる」姿勢を取る利用者が多いため、重要な要素であると考える。

5-3. 内発的心理面

内発的心理面は、横になったときの芝生の感触や質の良い休憩を望むこと、姿勢から得られる気持ち良さなどの個人的な要素である。利用者の利用目的や感じ方は異なる。その中で公園に対してポジティブで肯定的な心理を持っているほど「横になる」姿勢へと繋がると考える。

5-4. 外発的心理面

外発的心理面は、横になったときの周囲の視線が気になるという要素である。ヒアリング調査において経験者は「自分の世界をつくれる」と言及するほど滞留中の視線は気にしていないようだが、一方で 3.2 と 3.3 で「横になる」姿勢の人は周りの利用者の滞留位置、間の距離を測り、自らの足、頭の向きを調整しているように、滞留前は周囲へ意識が向いていると言える。また、未経験者は他者の目線や女性が少ないことを躊躇しており、滞留前に空間的なしつらえに障壁を感じることが考えられる。

6. 結論

南池袋公園の実態を測ることで、行為者間の視線の関係、芝生という滞留場所、ゴザというツールが「横になる」姿勢の特性と「横になる」を誘発する内的な要因であることが明らかとなった。また、「横になりにくさ」のハードルを下げるためにはオープンな空間のデザインと貸し出し品の数や清潔さの管理が重要であると考える。

現状、「横になる」姿勢への内発的な心理は肯定的な評価だが、公園の環境や空間による外発的な心理が否定的な評価にしている。「横になる」姿勢をとることは様々な条件を駆使する必要があるため人によって快適度は異なる。しかし、本人が快適で楽しめる姿勢をとるためには今後、多様な姿勢の利用促進や利用の可能性を拡げる空間デザインの設えと管理体制が大切であると考える。

参考文献

1) 国土交通省，″「新たな時代の都市マネジメントに対応した都市公園等のあり方検討会」最終とりまとめ″，2016 年 5 月